

## 年間第二十二主日

マルコ 7・1-8、14-15、21-23

2018.9.2. 高円寺教会  
イエズス会 山内保憲神父

福音書には、たびたび律法学者とファリサイ派がイエスと対立する場面が出てきます。安息日に麦を摘んで食べている弟子たちに対する批判、安息日に手の萎えた人を癒すことに対する批判の眼差し、断食をしない弟子たちに対する批判、などなどです。そして、今日読んだ福音書では、手を洗わないで食事をする弟子たちに対しての批判が読まれました。このファリサイ派と律法学者の態度について、イエスはかなり強い口調で、「その心はわたしから遠く離れている」とイザヤ書の言葉を借りて逆に批判しています。

律法学者とイエスのやり取りを見て思い出す体験があります。神戸に六甲教会という教会があります。教会の前は比較的幅の広い道で、市街地から六甲山の山頂にまで続く坂道です。教会の前には横断歩道がなく、教会から坂道を50メートルほど下ったところに信号があります。毎朝7時からのミサに一人のおばあさんが通っていらっしやいました。彼女は、教会の目の前のマンションに一室を借りて一人で住んでいらっしやいました。すでに亡くなられましたが、人生の終わりを祈りに近い所で過ごしたいと考えたのでしょう。晩年はかなり足が悪くなり、歩行器を押しながらゆっくりと歩いていらっしやいました。信号のある交差点まで下りるのが大変なので、そのまま前の道を渡っていらっしやいました。ある朝、わたしはミサが終わると、危ないので彼女と一緒に道を渡りました。すると、坂の下から、カッコいい自転車に、サイクリングウェアを着込んだおじさんが自転車をこいできたのです。自転車の男性は、わたしたちを避けながら「横断歩道渡らんかい！」と怒鳴って坂を登って行きました。思わず、「黙れ！自転車に乗って山にサイクリング行くぐらいなんだから、おばあさんが歩いているのぐらい黙って避ければいいじゃないか！50メートル下って、また50メートル山登りをさせるのか！」と怒鳴りたくなったのですが、教会の前ですからぐっと我慢しました。

確かに、その男性の言うことは、法的には正しいのです。道路交通法は大切な法律であり、わたしたちは法律を守るべきです。しかし、そもそも法律とはなんなのかということを考えさせられました。道路交通法とは、道路を使用する者が、安全に、障害なく利用することができるためのルールです。どうし

てそのようなルールが必要なのかといえば、余計なトラブルを避けて、快適にわたしたちが生きていくためでしょう。人間の命を守り、幸せになるために作られたものが、その法律だと思うわけです。では、お婆さんを 100 メートルも遠回りさせることは、誰の幸せに繋がり、誰の命を守ることになるのだろうか？大切なことはなんなのか？

福音書では、もう少し複雑な背景があることを忘れてはならないでしょう。厳しい裁きの神の姿を説くエッセネ派やヨハネ教団からも離れ、「神の愛」を説き出したイエス。ユダヤ教の主流派の人々もまた、律法を盾に自分たちの権威と利権を守ろうとします。彼らが自分たちの権威を高めるために、律法を守ることを厳しく説けば説くほど、律法を守ることからできない人々は社会からこぼれ落ちていきます。社会からこぼれ落ち、ユダヤ教主流派から見放された人々は、イエスのメッセージに希望を抱き付き従います。様々な理由で律法を守ることができないなど、「罪人」と言われている人々をこそ神は慈しんでくださる。その優しい神の愛のメッセージは、社会から見放された人々に響いたからです。イエスこそ反ローマ帝国の指導者になる人ではないか。利権を貪り、底辺に追いやられた自分たちに冷たいユダヤ教主流派を変革する人ではないか。さまざま期待を胸にしたイエスに従う人々の数は増えていきます。そのことを快く思わないユダヤ教主流派の人々。彼らは、イエスのもとにスパイを送り込みます。律法学者やファリサイ派の人々は、イエスを訴えるための様々な口実を探すために質問という形式をとった尋問を執拗に繰り返していきます。

律法学者やファリサイ派の人々は、自分たちの立場を守るために「律法」を道具に使ってイエスを攻撃する糸口を探しています。まるで、目の前にいるヨボヨボのお婆さんはどうでもよくて、自分が気持ちよくサイクリングをする目的のために「法律」を持ち出して攻撃する自転車の男性のごとく、「律法」を自分たちの目的のために使っています。この点を、イエスが「神の掟を捨てている」と批判しているのです。本来は、神への愛を示すための「契約」を、自分たちの立場を高め、守るための「道具」にしてしまっているではないか。神は、まさに目の前で苦しんでいる人々を見て心を痛めているのが、神の姿、「神の掟」であるにもかかわらず、その神を賛美するための素晴らしい道具である「律法」を使って、その苦しむ人々をさらにいじめているのではないかと。

このような問題は、人間にずっとつきまわっているようです。国民を幸せにするための「法律」を使って国民を支配しようとする政治家はいつの世にもいます。任された人々を守るために与えられたリーダーシップを用いて行われるパワーハラスメントは、様々なところで問題となっています。教会も例外ではありません。カトリック司祭が児童虐待で訴えられています。まさに同じこ

とでしょう。司祭に与えられている権威は、信徒を導くためのものであり、決して自分の快樂のために使ってはいけないでしょう。生徒が学びやすい環境を作るための校則が、ますます生徒を苦しめているなどといったことはないでしょうか。

ビアンネは、究明するときに、「地上のあらゆることから心と精神を切り離して、自分の仕事や用事について考えることなく、罪の数と状況を調べ上げ、その悪意の重さを計測するために、一方の手に松明を、もう一方の手に天秤を持って、自分の心の中に降って行かなければなりません」と勧めています。

自分に与えられているもの、体、健康、能力、地位、財産、全てを一旦神の前に置き、一体それらはなんのために与えられているのかを問い直すべきでしょう。本当に大切なことは何なのかを自分に問いかけてみるべきでしょう。与えられているものを、神の思いに沿って用いているのかどうか問われているのだと思います。

では、神の思いをどのようにして知ることができるのでしょうか？それは、あなたの目の前の最も弱くされた人々が必要としていることに耳を傾ければ聞こえてくるはずです。

逆に、あなたが様々な理由で苦しめられている立場であるならば、希望を失ってはけません。神は、あなたの側に立ってくださっているからです。

わたしたちが、絶えず「本当に大切なことは何か？」と問い続けながら、いつも主の思いと一致して歩んで行くことができるように祈ってまいりましょう。